28　怠惰で仕事に対して冷笑的な態度をとってきた会社員田口運平は、ある日から突然仕事に猛烈な情熱を示すようになり、周囲の同僚を驚かす。次の文はその心境の変化の経緯を記した田口の手記の一部であり、冒頭の段落はその心境の変化のきっかけとなった田口の息子の行動を記している。これを読んで、後の問に答えよ。 〈京都大〉　二〇一六年度出題

　その時、四歳になる我が子は、隣家の庭で同じ年頃の子供達と戯れて居た。何をして居たのか、声高い歌声と、跳びまわる頭とが低いブロック塀のむこうに見え隠れしていた。歌声が止んだ時、子供達は一対一の組になって取組合いを始めていた。中でただ一人の女児はやや離れ、甲高い声で隣家の男児に声援を送っていた。それと組み合っているのは我が子だった。取組合いは、明らかにゲームの雰囲気を持っていた。私は、我が子がゲームに勝つ事を念じつつ、それを見守っていた。小柄ではあるが敏捷な隣家の男児に、しかし、我が子は押し倒され、組み敷かれたのかその姿は塀の陰に見えなくなった。大柄だが動きの鈍い我が子は、勝負に負けていた。それだけならば私は単純に無念がりはしても、此処まで来る事は無かったであろう。次に見えた時、我が子の顔は、半面がべったりと黒い砂で覆われていた。遠目にも、それは不気味な顔であった。何かしたてる声が起った。怪獣だと叫ぶ声が聞こえた。我が子は、明らかに半ば泣いていた。それは、組み敷かれ、砂に顔り付けられたことに対する口惜しさの反応だったろう。我が子が隣家の男児を追いかけ始めるのと、周囲が声をえて我が子を怪獣だと囃したてるのとは、ど同時であった。しかし、我が子が負けた口惜しさから、泣きながら隣家の男児を追おうとしたのは事実だった。怒れ、追え、倒せ、組み敷け、と私は身体の中に熱い声をこもらせて我が子を見守った。砂に半面を覆われた我が子の顔には、しかし同時に曖昧で気弱な表情が見られた。怒り狂って追うものか、ただぐるぐると隣家の男児の後を駆けるものか、と。怒れ、怒れ、怒れ、と私は声を口の中にらせた。お前は負けたではないか。武者振り付いてを打て。しかし、怪獣だと囃す周囲の声が、我が子の迷いを一層混乱させた。迷いつつも、我が子は三周は曖昧な表情のまま隣家の男児を追い続けた。その表情から、急激に屈辱の色が失せていくのが見られた。怒りの力が退き、周囲の声に身をまかせ、自らを強い怪獣として隣家の男児を追う誇らしさの中に堕して行く様が私にはありありと見てとれたのである。私には、それが許し難かった。取組合いに敗れたのは許せる。砂に顔摩り付けられたのも許せる。泣くのも許せる。しかし、その怒りに熱中することなく、自らの全能力を振り絞ってその怒りに賭けることなく、その怒りを曖昧に他のものにすり替えたことが許せないのだ。誤魔化したことが許せないのだ。

　――しかし、我が子に対する私の怒りは、そのままの熱さをもって、突如、私自身に対する怒りに転化していた。

　思えば、私は常に、最もそう在りたいものの傍らに立ち続けていたような気がするのである。その生の瞬間における、方向感覚すらも定かではない何事かへの熱中に身を投ずることなく、瞬間を相対化し、時間を手段とすることによって生きて来たように思われるのである。子供の時は少年になる為に、少年の時にはより上級の学校に進む為に、そしてささやかな政治運動に参加した時には学問と運動の両者の中間にいずれとも決め難く。そして結局大学の後半は就職のために存在し、今は？　その為に今が準備の段階であり、待機の時であるという重い目的は既に存在しない。今こそ、今こそ私は最もそう在りたいものの真只中に在らねばならぬのではないか。それは、良くも悪しくも、今のこの仕事にしかないのではないか。賭けることを避け、熱中を逃げているのは、私自身ではなかったか。仕事に対する自らの取組方へのかの後ろめたさを、単に冷やかなる傍観的態度を取ることによって誤魔化していたに過ぎぬのではなかろうか。私の中には、今にして思えば、絶ゆる事もない熱中への〈飢え〉があった。〈飢え〉は、今も私の身体の中に熱く息づいている。誤魔化しに誤魔化しを重ねながら、潜在する〈飢え〉をあやしあやし、に私は今日まで生きて来たといえ手すりは切れた。最早、自らの身体を、自らの力で支えて進む他はない。意識のどこかで、私は常にそれを感じ続けて来たといえる。

　――私の中に、遠いの響きのように響いて来る一つのイメイジがある。口に出すのも恥ずかしい程、単純で素朴なイメイジが。定かではないが、そのイメイジが誕生したのは、私が今の生活に身を投じ、無意識のうちにでも、最早、この先、現在というものを充たす外に、先に招いている重い目的等というものは存在しないと感じ始めてからではなかろうか。それは、人間の意識がまだ草のように健やかで、石のように強固であった時代における労働のイメイジである。全ての筋肉の力を振り絞り、扱いにくい農具をあやつり、土を起し、種子を振りき、草を刈り、羊を殖やし、には天を仰いで雨を乞い、嵐には地に伏して神を求め――それ等の中にあるほとんど物のように確実な労働のイメイジ。人間が自らの生存と繁殖のために汗することが労働であるとするならば、今日の私の仕事の中にも、どこか一点、そのように単純豪快な労働のイメイジにがるものがあって良いのではなかろうか。それなくしては、私の単調なる毎日は、通勤と消費のうちに拡散してしまうのではなかろうか。デスクワークと限定されている私達の仕事において、個々の作業の手応えは、作られた資料の評価とか、それの有効性とか、きわめて抽象的なものに限定されてしまう。しかし、結果はどうであれ、それを製作していく過程そのものに、〈私はここで生きる〉と樹液の様にみずみずしいかつての労働のイメイジが、一点、光って良いではなかろうか。

　くして、私は、突然の不幸に見舞われたのである。何故ならば、自らの退路を断ち、自らの猶予を捨て、熱中によって（ああ、それが私に訪れるならば！）凝結して行く自己を通して此処に今在ることの意味を確かめんとする行為は、あまりに危険と犠牲の多い賭けであるから。第一に、もしこの重い賭けにおいて熱中が私を捉えることに失敗するならば、私は遂に何事も確かめ得ることな決定的に自己の傍らに立って生き続けねばならぬから。第二に、もし私が熱中に突入し得たとしても、その結果、私の労働の過程そのものが、あの遠い潮騒の響きのような遥かなる労働のイメイジにただの一点ですら繫がり得ぬものであるとするならば、私の熱中そのものは何処へって行けば良いというのか。そして第三に、もしも私が熱中し、その結果、私の労働が辛うじてての単純豪快な労働の中に繫がっていくものであることが確認され得たとして、その後に来る、重い確認の上に立つ日々は、現在までの中心はないがどこかゆるやかで安寧な日々に比して、輝やかしくはあってもあまりに厳しく困難な日々であることは明らかであるから。更に第四に、この賭けそのものが、安寧なる我が環境においてどのような風波を呼び、どのように高価なものにつくか、ほぼ見通しがついているからである。

　これは矛盾であろう。賭けぬ自分に立ち、賭ける自分に恐れるとは。

　しかし、賭けは為されたの半面砂に覆われた我が子の顔の気弱な変貌が、私の怒りに火を放ったのだ。ここまで来てしまった以上、私はこれを為し遂げぬ訳にはいかぬであろう。今、私は何者であり、私は何によって生きるのか、を自らに明らかにする為に。

　この賭け、又は熱中のみを唯一の方法とする実験を名付けて、私は、

　　　〈聖産業週間〉と呼ぼう。

（黒井千次「聖産業週間」より。一部省略）

問１　傍線部（１）はどういうことか、説明せよ。

◎問２　傍線部（２）はどういうことか、説明せよ。

問３　傍線部（３）はどういうことか、説明せよ。

問４　傍線部（４）はどういうことか、説明せよ。

問５　傍線部（５）について、どうして「我が子の顔の気弱な変貌」が田口を怒らせたのか、説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　Ａその時その時の自分自身が熱中するべき事柄に真剣に身を投ずることなく、Ｂ現在という時間を将来の目的のための準備や待機の時期だと考え、Ｃ自分を誤魔化して生きてきたということ。

Ａ・Ｂがなければ全体０。

Ａ＝４／Ｂ＝４

Ｃ＝２〔「真剣に生きてこなかった」などでも可。〕

問２　Ａ今は準備の段階であり待機の時であるという、Ｂ自分を支えてきた行動基準によってＣ自らを誤魔化してきたが、Ｄ最終目標である就職を果たして、その行動基準が意味を持たなくなり、Ｅもはや覚悟を決めて自分の熱中するべき事柄に全力を注がなければならなくなったということ。

Ａ＝２

Ｂ＝２〔「自分が拠り所としてきた基準」などでも可。〕

Ｃ＝２〔「自らを安全地帯に置いてきた」「熱中を避けてきた」などでも可。〕

Ｄ＝２／Ｅ＝２

問３　人間がＡ自らの生存と繁殖のためにＢ必死で自らの身体を使って働くような、Ｃかつて人間の意識が健全かつ強固であった時代の、Ｄ生命力にあふれた単純であるが豪快な、手応えを直接に感じられる人間らしい営みとして労働が想起されるということ。

Ｄがなければ全体０。

Ａ＝２／Ｂ＝３／Ｃ＝２

Ｄ＝３〔「生命力」「生き生きした」「人間らしい」「生気に満ちた」などの表現がなければ不可。〕

問４　今ここで、Ａ自分の仕事に熱中する中で、自分の生きている意味を摑むことができれば良いが、Ｂ全てを賭けて仕事に打ち込んでも、摑めなければ、その生き方はＣ自分自身のものという実感が持てないままになってしまい、Ｄ傍観的態度で生きていくしかなくなるということ。

Ａ＝２／Ｂ＝２〔Ａ・Ｂについては、「退路を断ち猶予を捨てたにも関わらず、仕事に熱中できずに生きる意味を確かめ損ねたならば」なども可。〕

Ｃ＝３〔「自己の存在理由を見失い」なども可。〕

Ｄ＝３

問５　たとえ惨めであっても、Ａ自分の悔しさや怒りに正直に行動すべきであったのにそのＢ自分の感情を曖昧にして、周囲の自分に対する声を無批判に受け入れ、それを演じることを誇りにすら思うことでＣ感情をすり替えた息子の様子が、Ｄ潜在的な熱中への渇望を誤魔化して生きてきた不甲斐ない自身の姿と重なり、Ｅ自分自身への怒りへと転化したから。

Ｃ・Ｄがなければ全体０。

Ａ＝２〔「屈辱感や怒りといった感情に熱中せず」なども可。〕

Ｂ＝２〔「周囲の声に迎合し」などの表現でも可。〕

Ｃ＝２／Ｄ＝２／Ｅ＝２